Dec. 1891
no. 297

女學雜誌

第二百九十七號
明治二十四年十二月廿六日發兌

涙の旅　紫苑山人

歳暮雜感

聖降誕　雲峯子

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 297. DECEMBER 26TH. 1891. 第二百九十七號目次

EDITORIAL; --Thoughts on the closing year.

CHILDREN'S COLUMN:--"Little Lord Fauntleroy." (Wakamatsu Shidzu.)

MISCELLANEOUS.

CRITICAL NOTES.

THOUGHTS AND FANCIES: Congratulary words to the home of a friend.

NOTES AND NEWS.

CONTRIBUTED ARTICLES":—Farewell to the 24th Year of Meiji." (Kawai Shinsui)

CONCERNING WOMAN.

●社說 歳晩雜感

●兒籃 小公子(若松しづ子)

●雜錄 クリスマス(雲峯子)

●批評 亞古士丁

●餘感 友の家の慶事(しのぶ)

●時事

●女報

●寄書 明治廿四年を送る(川合信水)○大坂に於ける廢娼論(月松子)○大坂に於ける廢娼軍の運動(耕讀園主人)

THE "JOGAKU ZASSHI."

THE *Jogaku Zasshi* (Woman's Magazine) publishes an authorized report of the annual meeting of the League for the Abolition of Licensed Prostitution, held on the 23rd instant at the Meiji Jogakko, Tokyo. The chair was takn by Mr. Yuasa Jiro, Member of the Diet. Among those present, numbering 40 in all, may be mentioned Mr. Kojima Kango, Member of the Municipel Council of Tokyo; Mr. Tsuda Sen, the wellknown agriculturist and temperance lecturer; Mr. Watase, of the Toyo Eiwa Gakko; and Mr. Nemoto Sei of the Meiji Gaku-in. The meeting was also attended by deputations from ten associations devoted to the cause of the abolition of licenced prostitution. Proceedings opened by singing the *Hai-sho no uta* (Song of Abolition of Prostitution) by female students. The programme consisted of the deliberation of four propositions, and the reading of congratulatory letters received from various localities. The first proposition, introduced by Mr. Iino Kichisaburo, related to the relief of the unfortunate female survivors of the recent earthquake who have been rescued by members of the League from a life of infamy into which they were on the point of falling. After a spirited debate, it was decided that a Committee be appointed to endeavour to find occupa-tion for these women in Tokyo and Yokohama. Mr. Watase Torajiro, Mr. Sasaki Shojuro, Mr. Nemo-to Sei, Mrs. Yuasa Hatsu, Mrs. Ushioda Chise, Mr. Tsuda Sen, Mr. Kojima Kango, Mr. Shimada Saburo, Mr. Iino Kichisaburo, and Mr. Iwamoto Zenji were appointed members of the Committee. The second proposition by Mr. Iwamoto Zenji, providing for the continued publication of the Leagu's organ, was unanimously voted. The third proposition, by Mr. Iwamoto Zenji, related to petitioning the Diet during the present session for the abolition of public prostitution and for depriving brothel-keepers of their political rights. It included also projects for dringing pressure to bear on the members of all Local Assemblies. For interviewing members of the Diet, and for the general distribution of printed tracts and lectures relating to the subject. It received immediate and unanimous approbation. Equally unanimous assent was given to the fourth and last proposition, introduced by Mr. Aoki Hidejiro, namely, that a memorial be presented to the Minister of Home Affairs, requesting him to enforce all existing laws and regulations tending to the abolition of public prostitution. The preparation of the memorial and its presentation were entrusted to a Committee consisting of Mr. Yuasa Jiro, Mr. Shimada Saburo, and Mr. Iwamoto Zenji. The recitation of the *Hai-sho Banzai* (Long Live the Cause of Abolition) closed the meeting. Tea was served in a separate room, after which those present at the meeting adjourned to the Fujimi-ken restaurant for luncheon, and disprsed abont 4 o'clock p. m.

(Japan Mail)

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百九十七號 明治二十四年十二月廿六日發兌

社説

歳晩雜感

○心裏不安

一歳殆んど盡きぬ、回顧すれば本年余は何事を爲せしや。或人は舊記帳を繙へし客嘯ぶきて曰く、產を殖せしと若干と。余が感之を福なりとせず。又或人は、揚々得意の狀あり、心中驕語を吐いて曰く、譽れを得たるは世人が知れる如しと。余之をしも羨やむとなし。密かに慮みれば、余は多少の義務を盡せり、左れど熟つら省りみて衷心倚ほ至誠至眞に欠くる所ろありとせば、万人の喝釆も波の空しく打つが如く、鳥の心なく羽叩たきするに異ならず、靈心何をもてか安んぜん。蓋し道德上の快樂は、現に身に享くる景况の何如にはあらず、目下心に感ずる靈魂上の安きとあると否とに關す。

○窓前の孤木

書よむ窓に對し、數十間を隔てゝ、榎の木、細く高く立つ。此垣は枝痩せ葉落ち、孤介蕭然たり。風烈しく砂飛ぶの朝た、たゞ玻璃窓のあるありて、余は室内に温たまり、而も窓外の光景を透視すれば、獨木風に搖ぎ、何如にもさびし氣なり。汝亦た歳の暮を感ずる乎、汝亦た寒きや、汝亦た心細きや、汝亦流轉を感ずるや。歳晩、物の哀れに動くは、蓋し汝も余も異なるとなけん。

○天空の鳥と野の百合花

人の通弊は衣食住居に念慮するにあり、韓愈曰く、衣食に奔走し、奔走に衣食すと。彼が豐艶なる文章の聲、何んぞ此の一事の故を以て悲慘なるや。左れど、人は一斗の米を食ふ能はず、六尺以外に坐する能はず、十枚の衣を襲ぬると難し。必竟其の切要する所ろのものは極めて少なきなり、丈夫烈女何ゆへに此の無用の奢りに一生を徒消せんとするや。過食腸胃を痛むるものは多し、餓て死するものは極めて少なし。震災の地、茅屋に住ひしものは身恙なく、巍々たる洋館に籠りし人は無慘に壓死されぬ。未だ聞かず、薄衣の人の多病なるとを、世上病多きの人は大率ね暖衣の徒なり。夫れ、吾等に無くて成らぬものは極めて微々たり、五尺の身躰を以て之を

求むるに、易きと砂を拾ふが如し、何人か之を得可らざらん。天下の頼なきもの孤兒に若くことなし、然れども未だ孤兒の餓死したるを聞かず。あゝ人は天日の下に立ち、大地の上に歩む、もし其職を正當に守らば、決して窮死することなけん。人は貧しきに死せず、慾に死す、無きが故に倒るゝことなし、無きとは憂ふるによりて病む。聞け、カーライルが天下絶妙の音調ありと言へるの辭を。辭に曰く、我汝等に告ん、生命の爲に何を食ひ何を飲みまた身躰の爲に何を衣んと思ひ煩ふこと勿れ、生命は糧より優り身躰は衣よりも優れるものならずや、汝等空の鳥を見よ、稼ことなく穡ことをせず、倉に蓄ふることなし、然るに汝等の天の父は之を養なひ玉へり、汝等之よりも大ひに勝るゝものならずや、汝等のうち誰か能く思ひ煩ひて其生命を寸陰も延得んや、また何故に衣の事を思ひ煩らふや、野の百合花は何故にして長つかを思へ、勞めず紡がざるなり、われ汝等に告ん、ソロモンの榮華の極みの時だにも其裝ほひこの花の一に及かざりきと。古來第一の人嘆じて曰く、狐は穴あり天空の鳥は巣あり然れど人の子は枕する所ろなしと、而も彼は萬國を其家となしぬ。左らば、同胞先づ衣食住に念慮することを止めよ、之よりも先に思ふべきは、人の天職何如にと云ふこと是れ也。人、天の使命を盡さんに、憂ふる所何處にかあらん。良將の卒曰く、吾將の命あらば小銃の孔の内にも飛込まんと。われ、天の下に立ち、天帝の命を行なふ、此時に當りて何ぞ衣食住に憂ひん。萬一、衣食足らず困して死することありとも、そは病の急に下りて命の即時に亡ぶるが如し、人世に存するの務め此處に畢りたるのみ、われは感謝して世を去らん。

一歳を顧みて、わが爲せし處ろ何事ぞ、堂々万物靈長の玉身を泥土に擲うち、區々たる衣食住の爲に三百餘日を徒費せしことなからずや。

豪快の言を爲すものあり、丈夫何ぞ衣食住に局促せん、われは大名擧の爲めに勞したるのみと。左れど、名擧の心は到底衣食住に念慮するの心より發す。蓋し同根の劣情のみ。

○反覆細思

ムーデー曰く、余は農夫が地を掘返すが如く、余が心を掘返す、斯て初めて罪惡を認識することを得と。罪と云ひ、短所と云ひ、德と云ひ、義務と云ふ、もと概括せる抽象的の語のみ

もし細かに其味を知り、之を實際に驗知せんと欲せば、一々仔細に之を分味し、切に身に引當て丶、刻窮せずんばある可らず。時は永遠より永遠に渉り、漠々として雲の連なれるが如し、人何をもてか之を確認せん。故に茲に歲時を區畫し、分秒を限引して、人の意識上に明々白々ならしむ。吾人が一歲の事を省みるも亦當に斯の如くなるべし。前途の行末を察するも亦當に斯の如くなるべし。

○歲晚の政況

暴りに政府を攻擊するものあり、亦是れ輕薄壯士一種の立身段のみ、吾人久しく之を苦々しきことに感ず。左れど、政府も亦た餘り評判好かるべき方にあらず、何人ありてか樺山君と共に薩長政府の功德を承知すべき。今や、議會と政府との衝突日に日に迫まり、正に今明を以て一大機を決せんとするの趣むきあり。もし議會をもて眞實なる輿論の代表者なりとするとを得ば、政府の信用は、大多數を以て否決せらる丶ものと云つべし。日本の政界歲暮に革運すると多し、之れなきはたゞ去歲一年にてありき。思ふに今年の暮には油々しき政變の決せらるべき時なれ。願はくは、年と共に新たなるの政治を見ん。民は最早や倦み果てたり。

○女學の景勢

本年下半期は、女子敎育の景況日に上は向に登りゆけり、數年間沈落したる景勢自づから復し、今や其當然の地に反らんとす。希ふは、西洋熱の再たび激甚ならざるにあり、而も保守僻の速やかに脫去せんとにあり。中を得て道に適ひたる女子敎育の安固に行わる丶は、蓋し之より初まる。吾人は斯學の爲に前途の多望を祝し、併せて一歲の經歷を回顧し、切に感謝の念ひに堪へず。

○女學雜誌

女學雜誌世上の友に見え初めてより、既に七星霜を重ね、壽三百、齢ひ少なしとせず、此間だ多少の知己を得て、同志の人四方に存す。もとより巧妙なる議論あるにもあらず、亦た機敏なる趣向のあるにもあらず、たゞ一片信ずる所ろの情緒ありて、幸わひに優渥なる讀者諸君が厚志を得たりしかば、遂に長じて今日に至りぬ。常に願ふらく、女學雜誌は、吾黨同志者意氣交通の器關とならん、敢て多くの讀者を得んとを欲せず、たゞ懷切に同志者の意見を發表せん、尤も懼る丶所

ろは、同志者の意見世に聞ゆるもの少なきにより、聞えて異論者の忌憚憎惡に會ふは敢て關する所ろにあらずと。女學雜誌は百人の愰讀者を得んより、一人の眞友を得んとを欲す。吾人未だ會計に長ぜず、幾度か經濟上の損失を爲す、然れども之が爲めに同志者を得るに增減あるとなし。吾人は眞實に吾黨の主義を守り、吾黨の意見を發表し、且つ吾黨同志者意氣交通の機關たらんと欲す。たとひ能くせざるによりて爲さずといへども、成し得べき限りは回々號々只管らに此進路に向ふて進む、何をもてか、年と共に更まるとあらん。然れども、吾人は新年一層精神を新たにし、いよ〳〵同志諸君の需めに應ぜんとを欲す、請ふらくは、新年后本誌所載の文辭に徵し、吾人が微衷を察せよ。年華多感、先づ此の一言を吐露せざるを得ず、讀者諸君、請ふ亦た年を新たにして相見ん。限りなきの情を以て、明治二十四年を送り、併せて吾黨最も親愛する同志諸君の惠福を祝す。

年頭は沈思肅念すべし、安ぞ屠蘇に醉放すべけん。
吾社が新年附錄は、尋常愰樂の小說たるとを願はず。

雜録

クリスマス（押韻）

雲峯生

（一）

いづこをあてに　あと訪はむ、
いとも榮えし　イエルサレム。
ツロもシドンも　ほろびしが、
民も往にけん　いづこにか。
ひつじのむれも　散りはてつ、
牧童のふゑの　おとたえぬ。
むかしの樣に　ひきかへて、
ユダヤの野こそ　あれにけれ。

（二）

きたやまおろし　ふきさはぎ、
くもきりのごと　きりふかし。
ふる里とほく　駱駝追ふ、
アラビヤ人ぞ　迷ふなる。
あやうき死海　なみあらみ、
沙路のふねは　なやむなり。
北斗のひかり　近づきつ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（三）

世はとしつきに　かはるなり、
ユダヤの野原　年ふけぬ。
されど天地は　うつるなし。
むかしをうつす　みづかゞみ、
ヨルダン河の　かげきよし。
みどりはふかし　いまもなほ、
カンラン山の　木々のいろ。
月日のかげは　野に山に、
榮えのひかり　照すめり。

（四）

高くかゝげし　ともし火に、※
なほてらさるゝ　つみのやみ。
死かげの谷の　あやうさを、
まぬかるゝ人　いくばくぞ。

（五）

カンラン山の　小夜あらし、
祈りしみ聲　つたふらむ。
血汐のあせは　さまよへる、
いたくの袖に　そゝぐらむ。
カルバリ山の　くさはらに、
流せる血しほ　あときよし。
罪のやいばに　ほふられつ、
うせし御身ぞ　貴とかる。
うせ給ひしは　三日のみ、
すがたさやかに　よみがへり。
さかえのかむり　つけにけり、
すくひの恩みぞ　ありがたき。

（六）

山はくづれて　地はうごき、
水火のなやみ　いとしげし。
世のわざはひは　絶えまあく、
あまたのひとぞ　なやむなる。

（七）

つみのやみじの　くもきりに、
迷へるひとぞ　なほおほし。
惡魔のちから　いとつよく、
よはきものをぞ　せむるなる。
されど救主は　愛ふかく、
なやむ人をぞ　なぐさめむ。
いとも貴とき　わがちゝよ、

（八）

わがあだびとを　ゆるしてよ。
かのひと〴〵は　なほいまだ、
ふむべき道を　さとらねば。
御身のいたでは　うちわすれ、
かくこそいのり　たまひけれ。
舟路あやうき　しらなみも、
靜まりはてぬ　みこゑにぞ。
てらすひかりは　あさ日なり、
やみのくもきり　はるゝめり。
めぐみのうちに　としを經て、
聖き日とこそ　なりにけれ。
いざやくにたみ　もろともに、
救主をたゝへ　まつれかし。

*山上の垂訓を云ふ、主の教へ給ひし詞中燈云々とあり、之によりて主の御教を燈に譬へしなり、

†十二月廿五日即ちクリスマスの祭日を云ふ去年のクリスマスより一年の間神恩の豐かなりしを謝するの意なり。

涙の旅＝吾が父

十一月十四日のことなりき義兄巖本善治氏を明治女學校の敎頭室に音づれくさ〴〵の話の次で例のごとく慷慨の言ば盛んとなりぬ阿兄慨然襟を正し云ひけらく這般の震災必ず深き天意の存するを信ず實に今は恩惠の時なり救ひの日也彼地今日若し悔改せずんば復た何の日か救はるべきアーヨナ安くに在るエリヤ何をなす起てよ阿弟爾ぢ彼地に馳せて預言せずや余聲に應じて曰く可也余亦之を思慮する既に日あり阿兄果して此死馬の骨を買ふの意ありや請ふわれ自らすゝめんと乃ち翌日之を我敎會員に議かる且つ知友大藤重賢ぬしは喜びて余に代り牧會の任を首肯ひ玉ひぬ是に於て事遂に決す十八日夜再び明治女學校に至り罹災地より來遊せらるゝ數孃より懇ろなる言葉をうけ且つ在宿百數十名の孃たちより平素わが嗜唱せる二百四十番の讃美歌を餞とせられ意氣慷慨暗涙を濯つて校門を出で阿兄と共に車を並べて新橋に向ふ時に凍月半天に吊り滿城の霜氣人に迫り遠近の電燈亦冬色を帶びて殆ど殺氣の骨に徹するを覺ゆ八時五十分鳴鈴鏘々のうち阿兄と握手袂を分つゆく〳〵芝浦品海を見渡せば空に凍る月は漣にもてあそ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ばれ岸邊に波をおどらす汐風は窓を犯して身にしみぬ女學雜誌社員星野愼之輔ぬしは殊に横濱まで祖道せられてわが同行の士なる藤井米八郎氏を紹介せられぬ十時五十分藤井ぬしと共に滊車にのりぬ夜はいよ〳〵ふけゆきて寒ます〳〵つよく函嶺の谷水は淙々潺々として齒の根もふるひぬまいてふじの高根は天外に冬の裝束をつけて立ち凍月はすごく之を睨みぬ

　心ありて誰かは見なん凍る夜の
　　ふじの高根の有明の月

あくる十九日は名古屋の友が宿りてあれこれの人たちを音づれぬ廿日木曾川を渡り宣戰地なる岐阜縣にぞ入にける三日四日は浮草の定めなく彼方此方のテントを移ること沙漠の旅人の如く永き夜にも短き夢を結びあへず廿三日よりいよ〳〵大垣のテントのうちに加りぬそも大垣にはすぐにものせるがごと大阪岡山より數名の若武者たちいと早くよりくさ〴〵の働きなみ〳〵ならずよるべなき孤兒をすくひ或は正しからぬ靑年女子をさとし或は授產のわざなど稍々緒につきてありぬ。廿七日の朝まだきおき出で見ればよべの雪五寸ばかりも積りかつ強く尙ほふりぬいざとばかりに獨り雪を犯しておちこちの巷を走り回り見れば破れし雨戶むしろあるは障子なんどもくづくれぬあやしの假り家は倒れぬばかりにてすき間よりひら〳〵と雪のふき入て病みてふしたる人の枕も心もとなくがりやの外には可憐の處女が雪風に髮を吹かれて力なく朝飯たきぬ或は寒さに堪えずやありけん泣きせがむ乳のみ子或は弟をすかしなだむる姉の子さてはむしろのかどに立ちてつぶやぐ老女アー滿城の此朝景色時あれば銀鞍にまたがりて玉鞍をふるひ銀世界など面白く浮かるべきか此荒みだれたる大垣アー誰か云ふ豐年の兆と余は感じぬ正しく是れ殺人の凶器也と。

かへり來りていざ通信をとなしける折しも阿兄より、

　キミノチチキトクスグカヘレトシラセアリ

と電報來りぬ父は年ごろレウマチズムのためになやみければ恐らくは熱を出したるならめされば事安からずと思ひければ私のこともて公の働きを止るは心ならねども獨子の務をおもへばまた止なき事なればとしばし戰ひの暇を告げ二時廿分下りの滊車に投らるゝが如く打のりぬ私戰場を友にのみまかせて立ち出る身の心のうち思ひみだるさま誰かよく之を知る。

かくして心急げば滊車も中々に早からぬ心地するこそ本意なけれ故里の父の上を想ひ出しゝまゝ

打ちなびく滊車の煙のしばしのみ
見えてきえゆく我世なるかな

廿八日の曉かた霜いとつよくして雪の如く三日の如き殘月覺束なく播广がたに見ゆ

此朝げ心ぼそくも見ゆるかな
淡路島根の有明の月

姫路より二十里あまり車夫をまし急がして夜十時すぐるころ家につきぬ「お歸り−」と聲高く走り出で〻迎えしは親しき族の人々四里を隔てし拙の家人あるはわが家に年頃出入する僕婢の七八人ばかりなりけりわれは右のくつを脱ぎしに家僕の手はすぐに左のくつにわりきわれは玄關をすぎて人々に一揖しつ彼等の初めに聲高かりしにさてはと想ひあがら如何にと問ひければ母は答へて先づ無難に昨夜七時十分にと聲はすでに濁りてあとは言ばなし然り余は知りぬ彼女は既に寡婦となりわれはすでに孤兒となりしぞ。

われは此とき五とせばかりはとみに年波の立ちしを覺え妻なきも主人となり子なきも家父となりぬやう感じぬ然れど余は云ひけらく

凡て主を信ずるものには働きて益をなすものぞかし身自ら苦みの杯をのまざればいかにしてか友の苦みをくみ得べきされば主に謝せんのみ殊に終りの平和なりしは我主と夫の友なる傳道者に謝すべきことぞかし我家は一人の良人と一人の父あるものを養ひしのみ然れども記臆せよ夫の濃州は寡婦となり孤兒となり子弟を失ひ舅姑を離れしもの果して幾万千ぞ尙ほ記臆せよ我家は幸に數頃の遺田數百の桑樹あり然ども彼等は家なく產なし更に記臆せよ我等は幸に神を知りキリストを知り又望をもてり然ども彼等は神なくキリストなく望みなく其憂ひや死に至るの憂ひ也其哀みや訴ふる所なきの哀み也アー彼等の淚は死の谷に馳するの流也然ども我の淚は生命の泉の滴り也。

三十日午後二時家にて葬りの式全く終り鄕黨の知友數百人儀を正し列を整へて西郊の墓地に至るキリスト敎の式は我故鄕にて初めてのことなりければくさ〴〵にいひ合へりとあん後にきゝぬ。

わが父なる人は二つにて其雙親を喪ない祖母ぎみの手にやしなはれて便りなきうちに學びのみちにすゝみ十七八のころ播摩なる蘭儒村上翁の門に遊びのち歸りてくすりのわざを營み再び藩醫の家を興し玉ひしが其ころは未だ洋醫のみち開けずしてありしまゝ妨げの多くありて先進輩もとやかく種々にいひしとおんさればわれ先きつとし病を故里にやしなひしころおのがうけし主のみちを人たちのあざわらふを見てさもこそと打ち笑ひ玉ひけり。

さて又の日み甚に詣でゝ高みより遠近を見渡せば我里の野山も何とおくけしき異りて見ゆ

目になれし我山里もいかなれば
異なる里の心ちするらん

又峯の木枯時雨を吹き下ろしぬ

亡き父のあとを尋て來て見れば
時雨ふる也冬の夕ぐれ

日を經つゝ我住みなれし家のとみに廣くなりぬる心ちして

朝な夕なほ俤は殘れども
わが家廣き心ちこそすれ

かくて朝な夕な遠近の友どちよりおくる電報玉づさなんど披き見るに懶しさて父はわれの都の空を出でし翌る日(十九日)より肝臓心臓などとみに惱みをましぬされどわれの上のと又私に及ばずわれを呼ばんと人のすゝめも諾がはず終りの電報も親しき人の私かにおくりしなりときゝぬわれに代りて子となり又牧師となりしは久保撫子花といふ親友なりけり又獨りのこれる母を助くるも此人ぞかし主の十字架の上にて其母をヨハ子にまかせ玉ひしを想ひ奉るもいとかしこし。

かくて十日ばかりは人を招きあるは贈物に忙しき時を送り十一日とありぬ再び大垣にと志ざし定めしことなればまた夜あけぬころより家人は打ち騒ぎぬ六時ごろ母及ひ友どちたちに祖道せられ枯れ柳なびくあたりの門にて袂を分ち心をはげまし車を急がせぬ町の東なる坂路を登り我故里を望めば時雨かゝりぬ。

此朝け母をのこして出でゆけば
涙と共に時雨ふる也

アー涙の旅?

十二月某の日濃州大垣にて

湯谷磋一郎

兒籃

小公子　第十五回

若松しづ子

時としては、極く僅かの時の間に不思議なヿがあるもので、曾てはホー氏の店先の高い椅子から赤い脛をブラ下げて居た小息子の運命が、本の數分時間に一變して、今まで物靜かな町に質素といふ質素な生活をして居たものが侯爵といふ位階に添ひて、廣大な所有を受繼ぐ身分に早變りして仕舞升た。さふかと思へば又英國の華族のうちに數へられた者が、現在、己がものとして、樂しんで居る榮華に對して毫末の權理もない一文なしの瞞着者とまで落されるのも僅か數分時間の樣でした。スルト又此度は萬づの體面を再び飜へし既に失ふ斗りで有つたものを元通りに恢復するは幾程も經ぬ内で有つたといふは實に不思議千万なヿです。

此事躰が案外早く方づいたといふものは、己れをフォントルロイ夫人と主張した女が、仕組んだことの惡るいに比較しては、存外、巧あらぬ處が有つた故で、其結婚と子供については段々詰問される内に、一言、二言、云ひ誤りをして、疑惑を引起し升た處から、度を失ない、果は癇癪を起して尚一層内幕を見現はされたのでした。女の言違ひましたといふは畢竟子供に關して斗りの樣でした。先のフォントルロイ殿と結婚し、爭論の末、手切金を取つて、別れたといふ事實には相違なかつた樣でした。併し其子供がロンドンのある處に生れたといふ話しは僞で有つたといふヿは、ハー氏が發見し升た。そして丁度其發見に付て、起つた騷動の眞最中に、ニユーヨークの代言人とホー氏等からの書狀が着したのでした。

此二通の手紙が到着し升て、侯爵とハー氏が書齋の中で處置法に付て協議された時は亦大層な騷ぎでした。ハー氏の言葉に、手前が婦人に面會いたして三回に及び升頃、余程心に疑を生じて參り升た。第一見る處で其子供の年齡が申立よりは多い樣に見受けられ升た。其中に、出生の月日を尋ねられたはづみに、一寸、口を滑らせたとか有升た。尤も直ぐ其塲はつくろひ升たが、此二通の書中にある趣が手前の心の疑惑によくも符合いたし升。ソコデ、極く望のある法方と申は極く秘密に此チブトン兄弟を電報で呼びよせ、突然引合せるといふので御座り升。彼の婦人も斯は仕組んでも、至

極不寄用な方で御座り升から、手前の考へでは、直ぐ其場でギックリ度を失ふはづみに、後尾を現わすは必定と存じるので。

と申し升たが、其計畫が思ひ通りの結果を奏し升た。其女には一向何も知らさず、疑を起さぬ爲にハ氏は其申立を取り調中と唱へて、折々對面をして居り升た。そこで描いた狂言も圖星を外さず、萬願成就の期も近きにおると思ひ込み、女もおい／＼聽柄な調子になつて來たとは、さも有りさうなとでした。

然るに或る好天氣の朝、ことの成つた上にはどふ、かふと、宿屋の座敷で結構極まる目算をしてゐる最中、ハ氏の來訪を告げる者が有升た。通ふる處を見ると、後ろへゾロ／＼續いて這入る人が三人有升た。第一に機敏らしひ小息子、第二に、丈の高い壯年、第三には例の侯爵さまでした。

此時其女は思わず飛上つて、萬事これまでといふ樣な大聲を立て升た。不意のことて、そ知らぬ顏にとぼけることも出來ませんかつた。今眼のまへ。見えた中で二人のとなどは久しく思ひ出す暇もなくつて居り升たが、萬一思ひだすとが有つても、數千里の遠きに有るものとも考へて居り升た。それ故一坐に顏を合せるとなどが有うふと思ふて居りませんかつた。流石にヂックは其顏を見てニタ／＼と笑ひ升た。そして、

イヤ！、おミナさんか？

といひ升た。ベンおる丈の高い壯年は、暫らく沈默で顏を見て居り升た。ハ氏は二人の顏を交／＼見て、

どふですお二人とも、同人を知つて御座るのか？

といひ升と、ベンが、

知つて居升とも、わしも、此女を知つて居れば、此女もわしに見覺えが有るんです。

といつて、一向平氣で女に後ろを向け、顏を見るも厭といふ調子で、窓際に立つて、外表を眺めて居り升た。スルト、其女が狂言のうらをかゝれ、惡事露見と知つてか、狂ふが如くに猛り廻り升たが、これはベンやヂックが毎々見慣れて居たとでした。其樣子を見、さま／＼自分たちの名呼わりをするのを聞いて、ヂックハ尙一層ニタ／＼と大口に笑つて居升たが、ベンは振反つて見もしませんかつた。それで、ハ氏に向ひ、旦那、どこへ出ても、この女が慥にそれといふ證據はキット

立て升し、まだ外に證據人がお入り用なら幾人でも出しませう、尤も此の女の爺といふは、賤しい家業こそしても實直人間です、此のお袋といふのは、矢つ張り、これによく似てゐた奴でしたが、これは歿なつて、爺丈は生てゐるんです。イヤ現在親が此の女にかけちや、外聞をわるがつてる位なんです。其の爺を引出せば、此の女が何者だか、わしのかゝあになつたことがあるか、ないかゞ直ぐと分かりまさア。

といつて、急に口惜さうに、拳を振つて、女に向ひ、

これ、あの子供はどこへやつた？モウおれが連れてつて仕まふから、あれも貴様と親子の縁は切るし、おれもモウ貴様に用はないぞ、

といつて居る中に、隔ての伏間が少し開いて次の間から男の子が顔を出して覗き升たが、これは、最前からの高話しを何とかと思つて出て來たらしいのでした。此小息子といふは別段容色の好いとは有ませんかつたが、一寸小奇麗な顔付で。誰が見てもペン—に好く似て居て、其顋には、三角の傷痕が有升た。ペン—は其兒の側へ寄つて、其手を採り升たが自分の手はブル〱して居り升た。

此兒もたしかです、出る處へ出て、云ひ立てゝも好うがす、

サアドム—やおれは貴様の爺で、けふは貴様を連れに來たのだが貴様の帽子はどこだ？

其子供は帽子が椅子の上に有つた處を指し、自分が余處へ行くのだと聞いて機嫌でした。近頃自分の一身に起つた不思議千萬なことに慣れてゐて。見知らぬ人におれは貴様の爺だといわれてもさほど驚きませんかつた。實は數年前に自分が赤子の時から居た處へ一人の女が來て、突然けに御前の母と名乘つた其人を何となく、厭に思つて居ましたから、モ一度かわつて外へ行くのを何とも思ひませんかつた。ペン—は件の帽子を持つて、戸方へ出で行升た。そして、—ハ氏が、

又御用が有つたら御承知の處へお便を願い升。

といつて、女を振り反つても見ず、其子供の手を引て行つてしまい升た。女は一層烈しく狂ひ廻つて居升たが、侯爵は眼鏡を鷲の嘴に似た貴族的のお鼻の上に悠々と載せ、泰然と其動止を睨んで居られ升た。スルト、—ハ氏が

コレ御婦人、怪しからぬ始末ではないか？、暗い處へ入れ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

られるが厭なら、少し謹しむが好からう。

いつた調子が中〳〵馬鹿に出來ぬ處が有つたので、この場合になつては身を退くが上分別と思つたか、恐ろしい顔色で一眼ハ氏を睨まへ、裾を蹴立て丶、次の間へ這入り、ピッシャリ戸を閉ぢ升た。ハ氏は、

モウ、これで面倒は御坐り升まい。

と申升たが、其言葉の通り、其夜過ぐと宿屋を出立し、ロンドン行の滊車に乗り込み、影を匿し升て、今後近邊に姿を見せませんでした。

爵侯が此立合を濟まして、馬車へ乘られると、トマスに、

コート、ロッヂへ參れ。

と下指され升た。スルト、タマスが御者の居る馬車前へ登りつ、

コート、ロッヂと仰つるぜ、とつぴやうしもないとになつて來さうだナ、どうも奇妙だナ。

馬車がコート、ロッヂに止まり升た時には、セドリックは母と共に客室に居り升た。侯爵は案內もなく、通られ升たが、近來の苦勞で曲りさうな腰も延びて丈も先頃よりは一二寸高く見え、幾年かお齡さへ若くなられたかの樣でした。鋭い其お眼も艶〳〵して居升た。突然、

フォントルロイはどこだ？

と言われ升た。エロル夫人は顔を赤かめて、前へ進み、

アノ矢張り、フォントルロイで御坐り升か、本當で御坐り升か？

といひ升と、侯爵が手を出して、シッカリ握手なさり升た。そして、

矢張りさうだ。

と仰つて、片手をセドリックの肩へ載せ、例の唐突な武張つた調子で！

フォントルロイ、貴樣、おつかさんが城へ引移つて吳れるか尋ねてみい。

と仰つると、フォントルロイは母の頸へ抱へつき。

かあさん、これから僕たちと一處に居て吳るんですよ。いつまでか一處に居るんですよ。

此時侯爵はエロル夫人の顔を御覽、エロル夫人は侯爵の顔を覗き升と、御前は全く眞面目になつて居られた樣でした。此計らひも、なる可く、取急ぐ方が好いと心つかれ、ながら、母

と知己になるがまづ好都合と考られてから、言ひ出されたのでした。――エロル夫人は、しとやかにニッコリし。
手前が參る方がキット御都合に宜しいのですか？
と問ひ升と、侯爵が又雜泊に、
さうとも、實は始つから、其方が好かつたのだが、ついそれと知らなかつたのだ。どうぞ都合して來て貰ひ度いものだ。

閑書

仁人に告ぐ

斷腸生

噫世には薄命の小女もある哉クリスマス早く來れかし善き贈物を愛する人より受取らんオヽ樂しきクリスマスと悅びに充ち玉ふ令孃もあらん新年來りなば正月にはトランプや歌ガルタの遊びをなしひねもす親しの友と睦み樂まんと何より待焦がれ玉ふ娘子達もある中に涙の雨に日を暮らし責折檻の地獄に沈み訴ふるに道なく告ぐるに人なく小さき心臟將に破裂せんとする薄命の小女もある哉涙あらん人は左の書簡を讀め。

……前略私も今迄は色々と堪えて見ましたがもう私もついかなくなりました、初めの中は只口にて色々と云はれましたが此頃では少しの事にてもひどくせられ、今日もけふとて耳をひどくうたれて血が多分出ましたそれでも父には言はずに堪て居ます心の中御察し下され是ではとても辛棒が出來ませぬから斷然心を決しました私はもう此家を逃て出ます　そして何處なりとも行かふと思ひます、何國と云ふあてもなけれ共　どこかに行く處もありましやう、もし行く處がなくて餓死すれば其時の事なり、故に行かうと思ひます、さて正月には父母も考へがありましやうから三ケ日を終りたれば十日頃までに機を見て逃げやうと思ひます、是は愛姉にのみ話します決して人に言ふて下されますな、あなたに此手紙を上て次は正月の年始狀を上げ其後は出立の時一寸御知らせ申上べく候。

元より私は死を厭ひません死を以て事をなします〇〇さん今迄は別して御心安くなされたりし御恩は忘れません一昨年御別れ申す時には、一生の別れとは思はれざりしも、今は再び見る能はず、私もし死たる後は決して私如き不幸の者を思はず善き友を選みて御親しみ決して〳〵見損じを

せぬ樣友を信じて世に大事をなし神の榮を顯はし玉へ此事は正月には申しませんから今より申して置きます。出立の時には一寸はがきを出しますが御返事は決して下されますな……後略……

十二月十二日

一讀實に涙に堪へざるなり小女年十六にして資性温順淑良能く父母に仕ふ生母嚢に此世を辭して今有るものは繼母なり、繼母の人となりは書中に見ゆる如く嚴酷無慈悲の人なり、小女前年同志社女學校に學びしも一昨年より父に從ひ東京にあり、終日家居して繼母叱責の下にあり、父は勤務の爲めに家に在るの時少なく家にあるの時も妻の意見に同意して是非を判別せず少しも前妻の忘れがたみなる此可憐の小女に目を掛けざるなり、小女の身には生傷の絶ゆる間なきなり、小女の涙は流れつきて今は涸れなん許りなり、終に家出の考を起す而して死の手は彼の小女を捕ふる日近し予は此書を得て如何にもして救ひ得させんと考へ而して其計策を施しつゝあるなり然れども遠く離れて但馬の山中に在るの予は俄に救護の策を施すに難し。

小女の親友にして予の親友なる一女は右の書簡に添へて左の如く言ひ送りたり

私は此手紙を見て今迄是ほど驚きしことはありません又悲しく思ひしことはありません私は彼の許へ手紙を出したくも彼の母は失禮にも開封します、そする時は餘計な苦を與へる樣なり、又助けてやりたくも知恵はなく金もなし進退谷まつて神に熱心に祈りました神は必ず助けて被下ましやう貴兄樣に良き考あれば敎へて下され、早く敎へて下されませ私は涙が出て困ります私はもう勉强も出來ぬ樣になります…………

予は熱血至誠以て全能者の手により博愛義侠の君子により此小女の苦難の取去られ母なる人の心の和らがんことを泣禱す幾本氏に委細を申し送りたり救護の心ある兄姉は同君に就て聞取り玉へ

編者白す、右書中の人の事は大方其途を得られたり、左れど尙ほ心ある人は申こし玉へ。

批評

○亞古士丁

田中達氏の撰に成る。此の神聖なる大英傑が事歴我が同胞に紹介せられたるを喜こぶ。植村君之に序して云く、今ま此の偉男兒の傳記成る、靄然たる母子の情、凜然たる一大好漢の精神、深遠なる建設的系統的の智力、一大神學の源頭たる其學、雄名を不朽に垂るべき其事業、摸範的クリスチアンたる其心胸皆な之によりて邦人に紹介せらると。吾人も亦た同感を表す。

隨感

○友の家の慶事

マリア、ヨハネの母と暫らく同居し、神の與ふる子等の事を語り合へり、其時何如に心うれしく、亦何如に心慎しみけん。之に比らぶるは恐ろしけれど、吾妻、其親しき友小島きよ子ぬしと殆んど相似たる間柄にて、或は共に勵まし、或は共に祈りてありけり。されば、亦もろともに大學醫院に入りて娩出の用意せんと約せし折柄、吾妻は期に外れて早く氣兆し端なく自家にて事畢はんぬ。濟子ぬしは、前方四回胎兒を得て一と度びも産兒を擧げ玉はざりしかば、此度或ひは亦万一の事なからんやと夙とに案じ煩らひたり。吾妻先づ其重任を畢え、直ちに余に語りぬ、彼友は何如あらんと。左れど此も亦た意外に安らけく、入院后濱田國手の老熟せる介治をもて、玉の如き女兒生れぬ。吾等が祝意は、友人小島氏の限りなき喜びに對するに堪へず、左れど吾家近日の幸によりて、一層ふかく他の惠福に同情を表するを得るを感謝す。

時事

○廿二日の議會

愉快なる哉、議會近來の景勢。樺山大臣が説演は、素より禮を知らずといへども中々に勇まし、アツパレ南洲の知己と云つべし。議長が處置、及び島田君の演説皆な一塊の妙あり。當日の議會の如き、些さか誇るに足る。

○今后の形勢

今后の形勢何如ん、深く邦家の爲に案慮す、一動一止もし双黨の確信する所ろより發すとせば何れにせよ之を祝す、皆是れ國家進步の途ゆきなれば也。たゞ軟たり、柔たり、媚たり、卑たる中間筒井流の奴輩を惡む。

○鐵道國有

大多數を以て政府提出の鐵道買收案、鐵道公債募集案を否决す。云、鐵道は國有とするを至當となす、然ども今の政府は之を托するの信用あらずと。此論の條理は兎に角明白なり。

萬國婦人基督教徒禁酒會第一總會

十一月十一日あさ萬國婦人基督教徒禁酒會初會を米國ボストン府舊趾ファニール亭に開く亭内國旗をかざし白羅をかざり祝頌千點佳氣滿堂白ふしてはなの如き畵欄のうすものは近く座邊に落ちて雪かとぞ見えける三十萬人署名禁酒請願に付四十國の代表者此に類聚し席次には支那印度墺太利など標出しありて婦人禁酒會世界漫遊者クレメント、リービット夫人の座上には特に白帶の球儀いろどれるをゝきたり。

會頭ウイラード女史着席異句同音に聖歌「ちよへしいはよ」を唱し詩篇の朗讀ありて會を開く英國婦人禁酒會々頭ヘンリー、サマーセット女史先づ歡迎の辭を爲して次に會員の名簿を點呼す禁酒議案異議なく決定の後ハウ夫人聖歌獨頌バーンス夫人の祈禱ありて會を閉ぢぬ。

午後の會合には會計エステル、プー女史立ちて萬國婦人禁酒會設立後四年間會費收入金十七万六千九百九十四弗費用總計金十三万三千九百二十弗差引欠乏の分は國民會より支出の旨報告。

役員撰擧の時來るやウイラード女史はサマーセット女史を會頭に推して一塲烈々たる演舌あるにサマーセット女史之に答へて英國の新事業を爰に披露し首部並に會頭の米國にあるべき旨縷々陳述會頭投票の决果はウイラード女史かぎりなき歡聲の中に再選せられけるに衆齊起して「かみは女王を輔く」の英國々歌を歌ふ。

サマーセット女史衆に向て曰くおのれ家にありて斯歌を聽けば此は只だ吾英國の女王を頌するにのみ協へりと思ひき然るに今此に在りては吾禁酒女王ウイラードを措て誰をか壽かむとあるに歡聲新に起りて手巾の波の中に衆「めぐみのもとなる神をほめよ」といふを唱へぬ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

會頭按手禮執行スミス夫人祈請バーオー夫人祝禱。

サマーセット女史副會頭となりアナ、ゴルドン女史書記となりウイルヤム夫人會計となる。

禁酒會世界漫遊者のはじめなるクレメント、リービット夫人は四十三國羇遊の物語をなし閉會後更に他境へ向けて別け行く可き旨一同へ披露。

サマーセット女史は印度鴉片の害毒に對して禁酒會委員より英國政府へ願書差出の件を提出したるに一人の異議するものなし。

此日更に諸國委員の隨意談話あり辨士フランスより來れるものありイタリーより來れるものあり西アフリカより來れるものあり大凡此萬國婦人禁酒會開會の週間は日々三次の會合を爲し盛莚を其間に張る月曜一夕音樂亭に於て「リチラル」の宴ありリパモア夫人宴主となりて列席の婦人は悉く宴主の如く行ふものなりしといふ。

それ此一週の間注告の投書箱といふものをトレモント院門前に設けて開會中諸般の注意を會衆になさしめ委員に於て深く省るの地をなせるが如き注意到らざるところなかりしとぞ。

寄書

○明治二十四年を送る

川合信水

「昨日さいひ今日さ暮して飛鳥川流れて早き月日なりけり」明治の二十四年も行く〳〵將に盡きんさす、見渡せば都下百萬の人士は何さなく繁々たり忙々たり、嗚呼一年總計算の時は來れり、商家の算盤殊は上下に遑あらざるべし、試問す、今年は損せしか、得せしか、去年よりも收入多き家は定めて喜ぶなるべく、去年よりも收入少なき家は定めて面白からざるべし、有形の算盤は明かに有形の損得を知らしめ、人々是に由りて喜憂す、

目を轉じて震災地の空を眺むれば、想ひ更に堪へ難し、家は倒れぬ、人は亡びぬ、失ふ所夥くして、斷腸の人そも幾々人、霜は地に滿ちて破屋寒く、風は樹に叫びて鳥聲悲し、年將に暮れんさして、彼地の光景果して如何、

吾人有形の目を持つ、而して有形の世界に向て觀る所思ふ所多し、されご吾人は更に無形の心を持つに非ずや、此際深く考ふべきは、最も廣大なる、最も大切なる無形の世界にあらずや、請ふ無形の算盤をして無形の我を計らしめよ、去年の我、今年の我に比して如何、昨日の我、今日の我に較して如何、金錢の多少、學問の深淺よりも、我の立派不立派は大事なり、吾人は神の前に、嚴肅に、謹愼に、我を想ひ、我を考へざるべからず、

蓋し吾人は神によりて生き、生きて世に立つ、乃ち吾人は神に對しての我さ、世に對しての我さを思考するを要す、嚴かに祈りて聖書を繙き、而して基督に對し、使徒の人物に對せよ、我の人物幾何か進歩せし、幾何か基督に似たる所出來しや、愛するは似るの始なりさいへば、我れ基督を愛するを次第に深くして、基督に似る所次第に多かるべき筈なり、而して若し似るを無くば、如何に口に愛を唱ふるも未だ基督を愛するの愛足らざるなり、更に一轉して世に對せよ、我は幾何か務めを盡せし、幾何か人の爲を計りしや、人世五十恥レ無レ功、生れて世に功無く、人に益くなんば禽獸にも如かざるべし、草木にも劣るべし、盜人を善くするとは即ち自らを善くするとなり、自らを善くする能はざる者は、他を善くする能はず、他

を善くせざる者は自らを善くする能はざるなり、「善樹は善果を結び悪樹は悪果を結ぶ」吾人は内に向て善樹なるや悪樹なるやを省み、外に向て善果を結びしや、將た悪樹を結びしやを思はざるべからず、

此暮に際して、此我を思ふ、必ず當に肅然たるべし、善くば喜び謝して、悪くば考へ正して、以て年の往くを送るべし、

誰か年暮を悲む者ぞ、誰か墳墓に近くを歎く者ぞ、肉の齡は老て益々衰ふと雖も、靈の齡は進みて益々盛なり、塵より出るものは塵と共に朽つべしと雖も、靈より出るものは靈と共に永存すべし、さては神を畏れて其誠を守らん哉、基督曰く「我誠を有ちて之を守る者は即ち我を愛するなり我を愛する者は我父に愛せらる我も亦これを愛して彼に自己を示すべし」と、祈禱し感謝し、悠々として明治二十四年を送る。

○大阪に於ける廢娼論

月松子

吾蜻蜓洲を一貫して恒に妖雲を排し正義の眞光を輝しむる正大の氣一たび鬱散して廢娼論となるや各地方の志士は之れか爲めに身を委し躰を任して犠牲に供し之れが主動となり大に天下の耳目を聳動せり吾大阪地方に於ても志士義人は大に此擧を賛し奮ふて公會演説をなし地方人士の良心に訴へて輿論を喚起し又種々の手段を施して攻擊を淫風充滿せる遊廓に加へて腐敗せる遊冶郎の精神を警醒し幷せて可憐なる姉妹を牛馬に等しき慘憺たる境隅より救ひ出し正義は赫々たる旭日の如く輝き仁愛は和氣胎蕩春霞の如く充滿せる樂園に化し以て廿世紀の新世界を迎へんことを期せり計らざりき世務多忙と雷同の志士か困難を見て遁逃し爲めに一挫折を來さんとは爾來爲めに運動せんと欲して空しく今日に至れり翻つて既往を顧みれば結果なきか如く見ゆ然れとも決して失望すへきに非らす古來因襲の久しき大樹豈に一朝の一擊に倒るへけんや關西日報の報する所を見るに昨年廢娼の志士運動せし六月中の遊客總數と本年氣樂に彼等か誘ひ込し遊客總數を對照すれば殆んと四千人の差あり余輩は思ふ一人の遊客にして不生産的に幾時間と幾金を費すか元より知る能はされとも假りに平均六時間と金一圓を捨つるとせんか一ヶ月從來不生産的に費消せし四千圓幷に二万四千時間は吾人の運動により生産的に加入せりと云はさる可からす豈に喜ぶへき現象に非らすして何ぞや竊かに聞く其當時遊廓に於て重立ちたる人々は相談會を開き種々熟議の末線香或花一本代に於て一厘の積立をなし存娼會を興し或は雜誌に新聞に反對を試み又請願委員を設けて國會請願の取消しを乞はんとし或は生花會慈善會音樂會を起して藝娼妓の品位を高むなど高尙めきたる口實を設け實に周章狼狽以て紀錄を避けんとせり然るに不幸にして議事堂は火災に罹り吾人請願の素志を貫く能はず時勢の變遷と共に空しく歯を切し腕を扼して遂に成す能はす淫風益熾んに獸慾愈漲り待合の如き曖昧なる茶屋は日々に增加し地方有爲の精神を蕩し去りて不生産的柔弱の土地と化せんとす今試に大阪に於ける尤大の繁盛を極むる南地花街に於て如何に增減せしかを示さん(他は繁雜を恐れて省きぬ)

一月中現在せる
- 貸坐敷　三百九十四軒
- 藝妓　三百八十二人
- 娼妓　四百八十人

花數合計
- 藝　十一万三千二百三十九本半
- 娼　九万七千六百七十九本

之れに對する遊客總數一万五千七百三十六人

其代金二万六千五百六十五圓三十五錢一厘五毛

六月中現在せる
- 貸坐敷　三百九十九軒
- 藝妓　三百五十七人
- 娼妓　五百十七人

花數總計
- 藝　十一万三千九百四十七本
- 娼　九万八千七百七十二本

之れに對する遊客總數一万六千三百七十二人

其代金三万二千三百三十七圓四十三錢五厘

あゝ志士！義人！此の總計を見て果して如何なる感を有するや記臆せよこは只大阪一部分の總計なり此他松島曾根崎の如き處々の總合計を擧けたらんには實に驚くへき巨額に登るへし殊に聞く此の總計も概算に止り其詳細に至りては非常に多額なりと實に此の巨額なる金驚くへき時間は身躰を害し良心を汚し太しきは恒に新聞に散見せる痴情の爲めに貴重なる生命を捨て耻を紙上に晒すか如き眞に憎むへき不生産的の魔窟に陷入しつゝあるに非らずやあゝ志士！義人！此の恐るへき此の憎むへき魔窟を倒し尅はさる乎聞く古者源賴光は單身魔窟に投して悪鬼を亡ほし一世の大業を奏せしに非らすやあゝ此の無形の食人鬼愈横行して地方の有爲の精神を食ひ盡さんとす今や此の食人鬼を亡ぼす源賴光何くにかある余輩基督教徒は之れか爲めに熱血を絞りて天に祈り犠牲となりて奔走し去月三日廢娼演説會を土佐堀靑年會館に開き大に運動なさんとなせしも不幸尾濃極慘なる一大變災に遭遇し救助運動の爲めに他を顧す遑なかりしも今や靑年會矯風部に於ては矯風軍を組織し大に軍備を整へ來春早々東京より巖本善治君を聘して大演説會を催し愈奮ふて其根據を倒し益々進て遂に地方を一洗せんとす願くは志士義人よ宗教の異同の爲めに離るゝなく正義の爲めに此擧を賛け多數の丹心凝て源將軍となり亡魔の大業を奏し赫々たる眞理の光を仰き和煦胎蕩の新世界を迎へさしめよ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○大阪に於ける矯風軍の運動

浪華北郊　耕讀園主人

大阪は四通八達の地關西の咽喉なり余輩は先づ此地を扼し娼妓の營を布き大に軍氣を振はんとす蓋し大阪の敵軍たる此百年の間市内の要地を占畧し經營苦辛其勢殆んご當るべからざるなり去れば我軍の戰畧は主として長久の計を以てし時に奇兵を出して彼輩の虛勢を挫き彼輩の前衛を襲ふべし虛勢前衛とは何んぞや曰く寶惠駕曰く掛行燈の類是なり乞ふ試に之を詳説せん。

毎年一月大阪市の南方戎神社及北方天滿神社の祭日に於て然も早朝より藝妓の盛美を盡し艶を競ひて寶惠駕と稱する駕に乘り妓夫幇間の輩數人新衣を着し向鉢卷足袋洗足にて之を舁き淫聲觀呼市内を橫行す前後四日間市民之が爲に殆んご狂せり甚きに至りては路傍の民家其格子戸を開らき特に金屏風を引廻し擅布を布き親戚を招き朋友を呼び斯くて共に之を觀て以て無上の快樂となす嗚呼風俗の醜、貞心の腐敗是に於て極れりと云ふべし吾人實生ならざるも焉んぞ流涕長大息せざるを得んや。

初めて大坂に來るの人妓樓の交互參差たるに驚かざるものなく辯言せば大坂の遊廓は良家と伍を爲し且必らず一方の要地に在り去ればステーションに到る道船舶の出入ある處人民の湊合する處必らず遊廓あらざるはなし而して必らず遊廓の遊廓たる事を認知するに至らざるはなし是れ則ち掛行燈の毎戸に揭げられ一種の異觀を呈するによるなり姦淫者曰く掛行燈を見ずんば眠むると能わずと夫れ旅人すら直に其醜業たるを知るに至らしめ既に知りたるものは乃ち姦淫の念を起さしむるに至る醜業の耻づべきを知らず之を暴露誇大にして良民を誘惑す何等の罪惡ぞ社會恬として省みず政府之を禁ずる能わず余、業務をとらんために他に通行すべき道なき故已むを得ずして此街路嗚呼此街路、兩側に掛行燈の光、地獄の鬼火陰々として相連る處を通行する每に感慨胸に迫り轉々悲嘆に堪えざるなり仰ひで天を眺むれば淫風空を蔽ひ、伏して地を覗れば醜俗世に漲れり正義の軍旗、輝かんとする豈に其故なからんや。

以上二事は是れ大坂に於ける敵軍のラッパなり軍旗なり余輩は第一に彼輩が市内を橫行するを禁じ第二に掛行燈又は其他如何なる方法を以ても其業體を公にするを禁ずる事とを必然決行せしめんとす此事些少に似て却つて彼輩に於て其痛苦を感ずると最も大にして延ひて社會の良心に刺激を與ふる最良の方法なりとす。

既に然り彼輩の虛勢挫かれ前衛敗れんか義人の聲必らず揚るべし果て然らば破竹の勢直に其本衛を拔く是れ機を待ちて勝を制するの兵法なり我軍今や戰線を張り斥候を派し將に明春を期し旗を擧げ馬を進めんとす乃ち聊か戰畧を本軍に報し以て自ら初陣を祝す。

女報

可愛子編

●大地震に付ての女報（其八）

●金圓下賜　皇太后陛下は去る十四日日本赤十字社々長佐野常民氏を召させられしも、所勞に付副社長花房義質氏青山御所に參上したる處、畏なくも杉皇太后宮太夫ゟ左の恩命を口達せられたる由。

一金百圓　日本赤十字社

右は岐阜縣震災非常の惨狀に際し其社京都支部より不取敢近地大垣へ醫員を派遣し救護に盡力候旨被聞召特別の思召を以て支部救護員の内へ下賜候事

●女學校及び婦人會の義捐　島村教會婦人會より金四圓十錢●札幌スミス女學校より金十二圓三十八錢九厘●日本基督教會札幌婦人會より金五圓●日本基督品川教會有志婦人より金七十錢●銀座美以教會婦人中より古着三個●日本基督教會本所教會婦人有志者より古着一包。何れも震災地に義捐せられたり。

●クリスマスの震災義捐　嚢に橫濱共立女學校に此事あり、今又聞く築地十三番の海岸女學校にては、去る廿四日は例年の如くクリスマスに關し種々贈答あるべき筈なるが、本年は例もの年柄と違ひ尾濃震災の大不幸ありしとなればとて、當日は贈答を廢し是等の費用を轉じて右の震災義捐に抛つとをなせりと。

●長崎に於ける幻燈會　長崎に於ては基督教靑年會員の働きにて縣知事、外國領事、書記等の賛成あり、其勢ひ遂に知事の夫人、書記官、外國領事等の夫人發起人總代となり、新聞紙に廣告して、去る四日五日市內舞鶴座に於て、震災救助幻燈音樂會を開きしに、五千人許を容るゝに足る舞臺の中立錐の地なきまでに人滿ちぬ、右二日に通券を所持して入ると能はざりし四百餘人の爲めに、又八日の夜幻燈會を催しぬ、〆切は十一日なりしが、九日までに集りし金額四百七十四圓餘、尙續々集る、新聞の廣告も其他の印刷物等も皆義捐なりき、外凡ての費用は發起人奮て擔當せられ、集金は悉く震災地に送る筈。

●伊藤しま子　今回の震火災に付、夥數負傷者の出來し事を聞くや、二百里內外の遠路を厭はず、自費を以て岐阜縣病院に看護に赴きたりし岩城國川沼郡坂木町伊藤しま子（三十年）は、至て懇篤忠實にして、患者を大切にさるゝは勿論、坐作動止甚だ正しく、院長始め職員一同感心し居る由、同女は岩城に在つて小學校の教員を勤め居りし人の由。

●皇后陛下御乘艦用の御旗　豫て橫須賀鎭守府より、三越洋服店の橫須賀出張店へ其製造を命ぜられし所の皇后陛下御乘艦の時軍艦に樹つる御旗は、此程出來上りて鎭守府へ收め濟となりしが、其旗は橫二十一尺縱十二尺の緋色厚七子織にして中央に金菊章を織出せしものなり、其地は京都織物會社が丹精を凝して織しも

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

のなりさいふ。

●故博經親王妃郁子殿下　は轉地攝生さして、去る十六日出發、靜岡縣下熱海鑛泉場へ旅行されたりさ。

●拜謁　露國比德堡より歸朝の西特命全權公使及び夫人は、去る十八日午后二時、皇后陛下へ拜謁仰せ付られたり。

●東洋英和女學校　麻布東鳥居坂町の同校は、去る廿三日午后二時本年の閉校式を擧行せり。

●東京府高等女學校卒業式　去る廿日同校内に於て、本年四月第一回卒業生十五名及同十月第二回卒業生卅八名の證書授與式を擧行せり、當日は府知事書記官を始め來賓凡そ五十餘名ありたり。

●西洋婦人御世辭をいふ　上院に一洋婦人通辨人を伴ひて傍聽に來たる、受附の守衛に向ひて「私の故鄕なるアメリカにも國會があります若し洋行なさるゝ事がありませばドーカ傍聽して下さい」守衛は頭を搔ひて「ハイ有りがたう」。(十二月十六日報知新聞)。

●婦人席に佳人多し　佳人五六あり、皆な盛裝して嬋娟たり、中に放鉄卅翁の女京子孃をも見かけぬ。(同日、同新聞)。

●下女の逃亡多し　昨今下婢の逃亡するこさが流行する由にて、其原因は本年夏季頃は下婢澤山なりし爲、給金抔は五十錢位にて上等の者を雇ひ入れられしが、目下非常の拂底にて被雇人の不足なる處より、隨て給金も三倍に騰貴せしかば、奔主人方を飛出して給金の多き方へ住み代へする故なりさ。

●ホイトニー氏の施與　慈善家の聞へ高きホイトニー氏は、昨年も寒空に海軍省裏手の路傍に、毎夜一人の施しおでん屋臺を出させたるが、本年は又近傍に家を借り受けて、燒き芋の施しを爲す筈にて、目今準備中の由。

●婦人矯風會年會、役員の撰擧　同會年會は、去る五日麴町區女子學院にて開會せり、金森小壽氏會頭に、非深せき子副會頭に、串田幸子會計に當撰せり、各部の報告あり、最後に巖本氏の談話あり、當日の集會者は五六十名なりき。

●婦人矯風會會計報告　昨二十三年十二月二十四日より、同二十四年十二月二日に至る會計決算は、收入支出差引殘金九圓二十二錢九厘にして、別に預け金二十圓さ運動費十五圓〆三十五圓の内二十圓岐阜縣出張に使用し差引預け金殘り十五圓なりさいふ。又事務所建築費豫算報告は、豫約總計八百五十六圓五錢にして、内三百四十一圓八十七錢五厘は第百十九國立銀行に預く但五分の利子也。

●婦人矯風會報告の適要は左の如し、

本年一月　特別會員須田駒之允氏より當會運動費さして金二圓を寄附せられたり

三月　(一)米國よりの來翰に應して萬國博覽會に連印書を提出す

(二)雜誌發兌を隔月さ爲すや否やの動議起りしが仝編集員不日他行に付きそれ迄は兎も角も今迄の如く引き續きて發行することに決す

(三)少年軍設立の動議起りて否決す

(四)當會のため運動費を募集することに決す

四月　麴町區中六番町十番地金森氏の宅にて湯淺氏の西京行き送別會を開く

五月　仝月の議員會にて編集員竹尾こさ氏他縣へ移住あるに付き後任を撰ぶこさ及び雜誌隔月發行の動議起りしが未だ確定せずして時間逼迫し散會す

六月　右編集員は竹越竹代姉に依托す兼れて仝發行所も仝氏の宅へ移つす雜誌隔月の議は矯風擴張のため不得策なるを以て否決す

七月　(一)米國禁酒會頭ウヰラード孃より募集金依賴申込まる

(二)横濱醜業に付ての建白書を呈出す

(三)突然會頭の辭職を申出でられしに由り二度臨時議員會を開き且つ會頭に續勤を請願すその時の總代は海老名りん子井深せき子の兩氏なりき

八月　議員の多數避暑のため留守多くして協議なかりき

九月　(一)七月中申し込みありし米國禁酒會頭のための集金は可決し且つその送達の方法は矢島氏に依托せり

(二)各部長各々通信員さなりて每月會の摸樣を編集委員に報道することに決す

(三)會頭辭職の件に付協議あり多數を以て可決し十二月總會迄副會頭金森氏之を處するとさ決す

十月　(一)廢娼仝盟會の委員を志方吟子氏に依托す

(二)來る廿六年米國シカゴ府に於て開設さるゝ万國大博覽會附屬無形大博覽會に付きての米國よりの書面を服部姉に翻譯を依托す

(三)十二月總會準備のことに付き協議す

(四)今月十五日を以て愈々金二十ドルを矢島氏より米國禁酒會長ウヰラード孃あてにて送る

十一月　震災救助の義に付き臨時議員會を開き慈惠院の看護婦十名賊地へ趣くよしなきゝたればこれが旅費を支辨せんさしたりしが彼等は皇后宮より御差し送

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り相成るよしに承りたれば更らに協議の上愛憐會助手三澤默二郎東京第一醫院君讃實地外習科生廣瀨むめ子西京同志社附屬看病婦學校卒業生大塚元野子の三名を岐阜へ派出することに决し仝月十一日夜滊車に乘じて仝地へ出張せり後に群馬縣にある仝會々員の醵金する處となり金廿圓計りを得たりければ先きの三名に加へて出口せい氏を送れり。

右の外に震災地傳道隊のことあれども、そは既に女學雜誌上に掲載し來りたれば、就て見るべし。

●東京市に於ける結婚と離婚　東京市十五區に於ける去月中の結婚届出數は五百〇六にして、離婚届出數は二百四十人なり。

●女教員は地方税の賊　去る十七日の富山縣會にて、引續き師範學校の項を議するに當り、議長と呼び「折角地方税のお陰にて女教員になつて、間もなく嫁入さか出産とか、勝手なとに止むを得ぬとの口實を以て辭するものとすれば、女教員は地方税の賊なり」と、一番藤村氏は絶叫せり、果して賊か、賊を養成するものも亦賊にあらずや、軍制の事に容喙すると直に亂臣賊子と云ふ、世の中には色々の事ある者なり。(日本)。

●北海道の女學　小學校は公立と私立とあり、就學の男二万千五百四人にして、女は八千五百五十三人なり◎小學校女教員は公立に十一人、私立に八人あり◎區立函館女學校、札幌女學校は、共に尋常小學科卒業以上の學力ある者を入學せしめ、略ぼ高等科學科に等しき學科及び女子に必要なる實業科を併せ授く、其教員は合せて男二人、女十二人にして小學師範學科卒業の者若くは實業に熟練なる者あり、生徒合せて百十五人あり◎私立に係る各種の女學校は、女子普通學科二、女子實業科二なり、此等學校の教員免許狀を有せる女子は十人にして、女生徒は二百十六人、卒業女生徒一人なり◎幼稚園は札幌區立創成小學校附屬幼稚園、私立函館幼稚園、私立スミス女學校附屬園の三あり、保姆各一名、幼兒計男九十七人、女九十六人なり。

●茨城縣下の女學　學齡就學の男兒は五万七千百三十一人にして、女は一万八千四百八十六人、前年よりも女兒の就學二千三百十六人を増せり◎小學尋常科を卒業せし女子千二百七十五人、小學高等科を卒業せし女子三十九人◎小學女教員月俸は平均九圓八十三錢、女授業生は平均五圓二十八錢二厘。

●神戸英和女學校の近況　◎前學年間に生徒一同より外國傳道の爲め金二十四圓を寄附し、尚又本學年も同額寄附の約束取結びぬ◎本學年に於て教師の異動は、三名の辭者、四名の新任あり、新任教師の名は、內國人にて渡部つれ子（米國カーレトン大學卒業にて數學科受持）、中嶋幸三郎氏（漢學物理學）、外國人にはケント女史（音樂）、ホルブルック博士（科學）なり、但ホルブルック博士は當期內に來校の運に至らざりし故、近頃印度より渡來せるルーツ女史代りて其任に當るといふ。

●香川縣尋常師範學校女子部　にては去る十二日第一回卒業證書授與式を擧行せり、卒業生十人、內學力優等者三人ありたり。

●感心なる婦女　靜岡縣長上郡蒲村上新屋河合七郎治の長女みつ女（明治元年生）は幼より學を好み、天質孝順にして父母の戒むる所之れを守らざるなく、師の敎ゆる所之を忘るゝなく、長ずるに及んで裁縫茶道の術に巧みにして、人皆な感賞せざるはなし、十五歲の時夫を迎へ、一家團欒曾て一回の風波起りし事なく、みつ女は益々兩親に事へて孝、夫に對して貞、農事の暇を見ては學事に心を委れ、嘗てより養蠶に志ありと雖も、近村就て學ぶべき者なし、去りとて遠國に出んは父母の心配一ト方ならざるを察し、即ち父を勸めて有名なる愛知縣の蠶業家小柳津忠民氏に就て其の業を學ばしむ、而して父の傳習を了へて歸宅するや、みつ女は鋭意熱心蠶業に從事し、毎々好結果を得、既に去九月長上敷知濱名三郡共進會の際繭を出品して一等賞を受くるに至れり、然れどもみつ女之れを以て得たりとせず、益其の業の擴張を計れりと云ふ、然るに惜むべしこの妙齡の婦女は永く兩親に事へ夫に添ふと能はず、遂に客月下旬黃泉の客となりて歸らざるの身となりたり、其の絕命せんとするや精神錯亂せず、唯兩親に先んずるの不幸を謝し、一家の盛衰は和合の如何にあれば、親戚の孤兒を養ふて其の跡を繼がしむべし、且つ我死后は我が衣類及器具を賣却して、地藏一躰を建立し、其の殘金を以て貧究者に施與し、決して葬式華美を盡くし賜ふなと懇ろに遺言したりと。

廢娼記事

●東京府　●娼妓の減税　頃日出願中なりし府下郡部娼妓賦金減税の儀は認

可になり、二十四年度は上り高の百分の五なりしが、二十五年度より百分の二分五厘に減税せりと。

●神奈川縣　●廢娼採否の照會　神奈川縣會にては、前年廢娼を可決し、縣知事へ建議せしも、爾來採否の如何を知る能はざれば、今回更に議長より縣知事へ照會して其返答を得る事に決したりと。

●山梨縣　●存娼壯士の死去　前號の女學雜誌上に記載せる、彼の山梨の新聞紙上に、單獨存娼運動云々と廣告せし某壯士は、其友なる某と、甲府新柳町の遊廓に遊び居り、喧嘩して其友は肩先より肺部まで切り込まれて病院に治療中死去し、彼自らは脇腹を貫かれ、重傷にて全癒の程如何あらんとのとなりしが、此程遂に死去せりと聞く、吾人は深く之を憐み、且彼が悔改に至らざりしを思ふて轉た痛惜の情に堪へざるなり。

●群馬縣　●藝妓縣會傍聽席に滿たん　群馬縣下各地の藝妓殘らずの連署を以て、いよ〳〵營業税輕減願を縣會に提出するになりたり、就ては該案が議事日程に登らば、前橋所在の藝妓百二十有餘名は勿論、高崎、伊勢崎、桐生等よりも續々傍聽に出掛くる筈なりとの事。

●鳥取縣　●娼妓減税請願　は新地より縣會へ去る十二日提出したりと。

●岡山縣　●存娼の運動　廢娼論の氣焔は却々盛んにして、殊に眞島郡勝山の遊廓を廢止したるを見て、人々は各遊廓とも追々廢止になるべしと推察し居るより、岡山市東西兩中島の貸座敷及び料理屋は、金策に差支へ借入金をなさんとするも、金主は廢娼に恐れ貸すべくも見ゑざれば、是に困却し困却の結果は存娼の運動となり、目下狂奔鼓中とのこと。

●愛媛縣　●伊豫宇和島の廢娼運動　昨年愛媛縣會に於て廢娼を可決したるも、知事は今日まで認可せざるを以て、宇和島基督教靑年會員は奮て之に對する運動をなし、地方有力家三十餘名の連署を以て知事に建白して其認可を促がし、縣會に向ては數多の靑年會員より、昨年縣會にて廢娼論を唱へたる柳瀨春次郎氏等數氏に認可を知事に請求すべきとを勸告し、又今治、松山の基督教靑年會に於て共に聯絡を通じて運動せんとを勸告したり。

●高知縣　●賦金の加倍　高知縣會にては、今度貸座敷並に娼妓賦金の倍課を縣知事に建議するの議を可決す。

●鹿兒島縣　去る九日同縣知事が、藝妓取締の縣令を發せしとは、前號の雜誌に記載する所なるが、今左に其縣令の明條及び制裁の縣令を揭ぐ

第六條　貸座敷免許地及藝妓住居地の外料理屋飮食店に於て來客の爲め藝妓其他の婦女をして歌舞音曲を弄せしむへからず

第七條　藝妓の外客席に於て同業類似の所業を爲さしむへからず

縣令第七十五號

鹿兒島市內(鹽屋村の內字洲崎を除く)貸席に於て來客の爲め藝妓其他の婦女をして歌舞音曲を弄せしむるを得す犯す者は刑法第四百廿七條第八項に依り處分す

●貸座敷移轉の令達　鹿兒島市の貸座敷は、是迄各所に散在せしが、今回右の營業者は來廿六年十二月限り同市鹽屋村字洲崎の內へ移轉すべき旨、此程縣知事より令達したる由。

●日本全國卒業女學生姓名一覽(學校創立より本年四月に至る、)

●地方の部

●宮城縣　尋常師範學校女子部　大津よしち　新妻たきよ　竹野てる子　鈴木うさし　相原はる子　黑野この子　細谷なほ子　作間よし子　黑澤きさの　沼邊さき子　條川はる子　塚元もと子　葛岡すて子　矢野あき子　水野さな子　上野しま子　伊藤久代子　木村ゑい子　松田さき子　大倉やす子　佐藤れん子　根來從子　飯川しゅん子　山內ふき子　栗野兼代　今田くに子　伊藤さく子　伊藤りやう子　千葉ゆき子　太田そく子　小關ゆき子　馬場そまち　大野わくり(合四十三名)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●福井縣尋常師範學校　本多さき子　吉田こたけ　寺田つる子　神谷すみ子　毛利おさ子　都築さみ子　林こまつ　本内さよ子　谷澤たま子　吉田つぎ子　林うた子　五本もと子　清田もと子　上田つれ子　樋口こいわ　竹田いし子　山本そさ子　柳川はつ子　中川なほ子　田川せつ子　前田うめ子　渡邊すゞ子　赤松さら子　田中ため子　堺さき子　井波みれ子　岩井しづ子　千葉かれ子　來栖こちやう　三谷もと子　土屋じゆん子　桑原さめ子　小幡きん子　都築りき子　西崎けい子　山本はつ子　土屋もと子　嶋本よし子　小林ぶん子(合三十九名)。

●山口高等女學校　桑原いさ子　河北つや子　鹽具もと子　今田しう子　宗像こきく　松田さこなつ　澁谷つち子　岡村つれ子　前村きくの　内田りう子　横山きく子　林この子　田村たき子　綿貫よし子　河田こさ子　栗屋たか子　脇屋ちよの　高橋みつ子　清水ちせ子　吉松きくよ　増野あい子　土井りよ子　本間いわ子　日野つれ子　松田はきの　米原よし子　兼重ゆき子　宮崎まち子　岩城はつ子　佐久間てる子　吉武つる子　山口まつ子　吉岡みち子　井上くま子　木梨ふしの　北谷さわ子　山根こう子　江口みつ子　光井なか子　石河かめ子　岡まさ子　北村もと子　中村きよ子　縣永くませ　永澤きよ子　村田すえ子　藤田みき子　奈古屋きみ子　羽仁その子　西さと子　平佐ちえ子　三井ちよ子　上田はな子　稲富たか子　福澄たけ子　井生つた子　吉岡ふつ子　口羽しえ子　戸田しげの　瀧田ちなり　篠田もと子　江亜まさ子　吉岡たに子　藤井まつ子　宍道たゞ子　北村みつよ　小松もと子　高崎たか子　徳光みれ子　靜岡ちか子　藤井きよ子　光永はな子　安藤うめ子　岡田やす子　宮崎いな子　徳永きり子(合七十六名)。

●愛媛縣尋常師範學校女子部●香川縣尋常師範學校女子部●名古屋清流女學校●名古屋金城女學校●靜岡暫花女學校●山梨英和女學校●岡山山陽女學校●宮城女學校●長崎梅香崎女學校●以上九校何れも創立日淺く未だ卒業生あらず。

品名	十二月廿四日
白米（一円ニ付）	
一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇二
三等米	一〇五
四等米	一〇八
五等米	一一三
正米（一円ニ付）	
美濃米	一斗三升七合
尾張米	一三一
肥前米	一三四
南部米	一五〇
行方米	一三九
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗九升〇合
上州小麥	一九〇
竹林麥	一八五
梅澤大豆	二一五
青柳大豆	一九〇
吟小豆	一七〇
白胡麻	一一八
黒胡麻	一五五
[illegible]（一円ニ付）	
赤穂	三、三
大鹽	三、四五
本齋	五、三五
新齋	五、八五
醬油（一円ニ付）	六五　七五　八八　一、一〇　一、二七　一、五七　一、七五　一、九〇　二、一〇　二、六〇
最上	
極上	
上物	
中物	
並物	
味噌（一円ニ付）製上	
地上白	六、八〇〇
同上赤	六、八〇〇
同紅赤	四、三〇〇

品名	十二月廿四日
染絹	
新花色絹	九五匁
同糸好	一三五
地染本花	一四〇
同糸好	一八〇
本京花色	一七〇
秩父絹	二五〇
本吉糸吉	二一〇
猩々紅絹	九〇
白弥絹	一一〇
色太縐	一三五
玉絹鼠	一四〇
同黑	一五〇
同石持	九〇
斜子石持	二〇〇
無地八掛縮緬	二四〇
小紋同	一五〇
觀光縮緬	二一〇
友仙	八五
木綿冬縞（一反ニ付）	
伊勢改長縞	七〇
同糸入縞	一、〇七
笠井糸入縞	一、〇〇
佐織茶縞	五一
同糸入縞	六〇
生桟茶縞	五〇
美濃双子	六七
同瓦斯二子	一、〇〇
同羽二重縞	一、八〇
物產縞	七五
結城地	八五
密柑（一箱ニ付）	
雲州極上	五〇錢
同上物	四〇
同中物	三九
同並物	三三

品名	十二月廿四日
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀大頭	二円、五五
同稀頭	二、一〇
同大頭	一、七五
同中頭	一、四五
同中茶	一、一七
狹山稀大頭	二、〇〇
同稀頭	一、七三
同大頭	一、四五
同中頭	一、三〇
同中茶	一、〇五
乾海苔（百枚ニ付）	九五錢　五〇　一、〇〇　七〇　一、〇〇　五五　八五　四〇　七〇　四〇　四五　六五
大森	
洲崎	
深川砂村	
大師河原	
潮田	
上總	
炭（一円ニ付）	
伊豆上	四俵、五〇
同並	六、五〇
丸備上	二、五〇
角備上	二、八〇
淺上	四、〇〇
水油（一樽ニ付）	
地水	六円、六〇
胡麻	九、八〇
荏油	九、七〇
桐油	五、五〇
綿油	七、五六
坂水	七、六〇
石油（一箱ニ付）	
チヤスター	一円、五〇
デボース	⋮
ホーキ	一、五二
ロシヤ	一、五四

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

震地傳道隊報告

婦人矯風會、錄

○震災地特別通信（第八報）

神戶の友信義會

諸君記臆せよ神戶に友信義會ある事を此會は今回の震災に就て起りたる不信者の團躰なりけるが基督教徒の救恤の旨義を贊成し同會は迅速に義捐物品等を纏め十一月五日迄に四拾六個の貨物を送れり此衣類點數は五千百三拾七なり昨日亦拾貳個の荷物を送らる之れ亦壹千貳百點に下らず而して同會が送りたる物品は一も汚れたる物なく夫々洗濯し仕立直して送れり十一月五日送りたる物品の洗濯及仕立替代金四拾八圓を要せりと此會合の義心には信徒も數步を讓らざるを得ず

岐阜に至る

根尾谷小倉にチフス病院を我傳道隊の手にて設くるに至れり故に余は同病院に必要の物品を携へ先づ岐阜に赴けり取敢ずチヤペル氏を訪ひぬ氏夫婦は慇懃に余を迎へらる時に東京中央會堂よりの派出員小出氏と共に菊池三郎氏（服部綾雄氏が計畫中なる）貧民授產の件につきチヤペル氏に相談ありて來れり氏等が說は我黨の三大目的の一なる貧民授產法に異なる處なし余は氏等に別れチヤペル氏に雜書數百部を貰ひ受去りぬ夫より南小柿氏を訪ひ氏と運動上につき大に謀る處あれば互に面會を約し夫より根尾谷に赴きたるは十一日十二時半頃なりき

根尾谷行

不知の旅行手荷物も多ければ步行なりがたく車を雇ひぬ道筋先日來の雨雪にて甚だしく荒れたり加之進むに從ひ道路破壞し岩石を飛し危險も亦甚し、余が本巢郡砂原村にかゝる時太陽は將に西山に沒し月は漸く光を放ちて高く左を觀れば艶麗なる紅葉の山右をながむれば淸雅なる松樹の山を廻る奔然たる谷川の水は玉を飛しぬ其風致に其自然に暫く我は同化されたり然し跡を顧れば悲哀なる災民の苦界あり前を望めば荒悽たる島取(根尾谷なり)の慘狀思ひ凝りて益々吾人狹小を感ず稍暮近き頃砂原村淺井平右兵衞と云る宿に泊しぬ此處に岐阜救濟會の吉澤氏來り宿り居らる余は同席して互に信仰上及我等が執る將來の運動の方針など語り合ぬ此夜私信など認め寢に就しは九時頃なりき

小倉病院

十二日午前七時三十分吉澤氏と共にワラジを穿ちて一人の道案內を雇ひて先に立て小倉病院に赴けり此處へは砂原村より一里半許右の山を越て至るなり通行甚だ難澁なり地名は左の如し

本巢郡外山村大字小倉假病院

中村友吉氏は我傳道隊より此處に派遣して本巢席田兩郡書記川合光明氏の非常なる盡力により余が順廻中未だ曾て其の比を見ざる全備せる假病院を造られたり亦藥品の如きも川合氏の盡力にて充分に廻り居り毛布の如きは今回余が持參せしにより最早不足のものなく中村氏は大に滿足を得て働き居らる亦北方警察署よりは巡查神谷氏を派して氏に力を與へ居りぬ目下入院患者は纔か四名なりしが其初めは二十名も有る樣の風說なりしと云然し猶戶々に就き一應診療さる筈なり余は看護婦を跡より派遣の事を約し去りぬ

根尾谷島取

島取の荒景は能く筆紙の盡す限りにあらず殊に先頃よりの降雨にて泥土を山より流し川脈は變じ其慘狀見るに忍びず山の中心破壞せしも纔に木の根草の根にて上土を支へ居りしが雨雪にて土は融解して山崩れ日々生じ岩石は我足元に飛びぬ其危險言ふべからず島取の西山は村の半と共に凡二十尺も落凹たり余は此地に於て明年入梅の頃一層甚だしき災害を蒙るに至らんとを慾ふ正午頃余は吉澤氏に別れ岐阜に歸れり

笠松病院を訪

昨夜根尾より岐阜に歸り救濟事務所に一泊して小橋氏に會し感話數刻十一時過眠れり

十三日　今曉日小橋、原其他二三の人と共に早朝集りを開き夫より笠松に赴けり相變らず三澤氏廣瀨大塚出口姉妹に我傳道隊の小野坦氏力を併せ働き居らる此病院に外來患者益々多く日々百名以上なり大塚廣瀨の兩姉妹は歸京追々延引したるが彌々本月の廿日歸京さるゝ事に定りたりと聞く亦本日大垣事務所佐々木氏より東京よりの打合等あり且つ將來の運動上に付相談したき事あれば來垣せられ度旨小野氏に報ぜらる故に余小野氏と同伴し大垣に一先歸りぬ

松田順平氏

氏は豫定の如く今尾に至られ携帶されたる衣類數百點を警官二名の隨從を得て夫

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

々其貧富の度に應じ醵與されたり之が爲此地の人民は大に歡喜せりと氏は此地に於て將來傳道に深く望みあるを信じ喜び居らる猶檢娼の事に付警官に計り將來運動上に便宜を得られたり猶明日は佐々木氏と共に再び今尾高須に至らる

目下傳道隊の働場所

大垣、潟谷磋一郎、佐々木笑受郎、松田順平、古田國子、藤井米八郎。笠松、小野坦。小倉、中村友吉。亦我團體婦風會より三澤廣瀬大塚出口諸氏なり。

十二月十三日夜　藤井米八郎

（第九報）

拜啓去十一日出石を發し十二日京都に着し昨日當地安着仕候是迄の事は藤井君の通信により御承知なるべし尚數日のうちに隊會を開きてのちに御報告の事あるべし然し兎に角尚數ヶ月間は非常なる覺悟の必要をかんじ居申候主若し許し玉はば土石を食むも此地の爲に勞苦せん聞く東京にては多分我隊の事につき彼是是非し玉ふよし然して數ヶ月の後に一變して云云のよし誠に御殊勝の事と存候然し記臆せよ土壁は人の見ざる地下に埋沒せらるゝ者なる事を彼等來て實を勉めよ我等は參粒の埋められて腐敗して後に芽をいださせたしと思ふのみ見よ若し東京にて主もし賜を與へ玉はざれば共にてよしエリヤは烏に養はれたり是より個人傳道に早く從事せんとす且つ來春の前芽のために準備せんとす見よ我隊のために祈り呉れ玉へ我等の飲みものは涙のみ實に涙のみ主よ願くは我等の實行をなして人の心を開き玉へアーメン

十二月十七日　大垣にて　潟谷磋一郎

尚ほ藤井君は大垣にあり

佐々木松田兩君は巡回中

震地傳道隊會計報告

第五回　（十二月十四日より廿一日迄）

●入の部

金百六十二圓五拾六錢九厘　前回迄入金合計

金二圓拾錢　十二月十四日より廿一日迄入

右内譯

金五拾錢	武州川越美以講義所婦人一名
金七拾五錢	武州川越聖公會内婦人三名
金十錢	山梨縣　牧野千代子
金十錢	仝　小山くの子
金十錢	仝　無名氏
金十錢	仝　高尾定平氏
金十錢	仝　坂本源一郎氏
金二拾錢	仝　分部友三郎氏
金十錢	仝　無名氏
金五錢	仝　無名氏

合計百六拾四圓六十六錢九厘

●出の部

百〇二圓四十三錢一厘　前回迄出費合計

五圓九十四錢　十二月十四日より廿一日迄出

右内譯

十五錢	（十四日）	大垣へ電報
四十五錢	（十八日）	大垣へ電報
五錢	（十八日）	大垣へ郵便及ハガキ代
六十錢	（十九日）	横濱西洋人救濟義捐者と打合の爲め往復滊車及車代
四圓六十九錢		傳道隊告示文三千七百枚印刷代

合計百八圓三十七錢一厘

差引現殘金五十六圓二十九錢八厘

右殘金は年内近日府下隊員震災地へ參るに付其節携帶すべき積り也。

○正誤

本誌第二百九十四號掲載第二回報告の中、二圓三十錢、青森縣田村東權氏の寄附は青森美以教會有志者の名を以て寄送せられたる者に付爲念追記す。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下 明宮殿下 御覽濟の書

巖本善治妻 譯

(リツトル。ロード。フホントルロイ)

小公子

小供のよみ本

譯者の序に曰く、母と共に野外に逍遥する幼兒が、幹のくねりて、尋常ならぬ一本の立木に指ざして、かあさん、あの木は小さい時誰かに踏れたのですネィ、と申たとか。考へて見ますと、美事に發育すべきものを遮ぎり、素直に生ひ立つ筈の者をくねらせる程、無情なヿは實に稀で御坐り升。邪道に陥らふとする父の足をとゞめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の徳を思ひ起させるは、神聖なる天職を擔ふ可愛の幼兒に限ります。私は深く幼子を愛し其恩を思ふ者故此珍重すべきまろうどを尚一層優待したいと切に願ふ者です」と。斯る主意にて譯成る。原著は近頃英米に轟き渡り、子供の讀物として愛々しきと潔き事の類ひ無きは更にも言ず、白髪の老者も心頑なの人も、之を讀る間は天使に接する如しとて、推賞大方ならず、改版十數回、且尚ほ劇に演して非常の喝汞を博しぬ。譯者は斯る原文の味を損せじとて辛苦せられ、紙數二百八十頁密畵十四箇入の大本として今日世に進め玉へり。一冊正價三十八錢。郵税八錢也

發兌元 東京市麹町區下六番町六番地 女學雜誌社

クリスマス及年暮年頭佳書

は面白き勸懲繪草紙にして第一子供にも分り易く大人にも教へとなるべき意味ある書物なれば土産遺物としては無類のものに候

定價一冊五錢 郵送料二錢

女學雜誌社

○普く主に在る姉妹に告ぐ

我儕今般同志者と相謀り、高知女子傳道學會なる者を設立したり。其の目的は有志の婦女をして、特別に聖書を講窮し、傳道の方法を實習せしめんとするに在り。主に在て愛する姉妹諸君の陸續來學あらん事を冀望す。但し本會の規則幷に學科課程を一見せられ度諸君は一片の端書を寄送あれ。

明治廿五年一月

高知女子傳道學會

發行所 東京市麹町區下六番町六番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述 つれ〱草講義	一冊	價金八	錢
鈴木弘恭大人述 文法口授	一冊	同十六	錢
鈴木弘恭大人述 百人一首講義	一冊（改正）	上三十五錢 並二十八錢	
船越鼎太郎君著 産婦小見攝生法	一冊	金十六	錢
關輪正路君纂 ひめ鑑	一冊	同四十五	錢
中島俊子君著 善惡之岐	一冊	同卅五	錢
横山雅男君著 婚姻論	一冊	同十六	錢
島田三郎、植木枝盛兩君演説 廢娼演説	一冊	同五	錢
巖本善治君述 妓樓全廢	一冊	同五	錢
島田三郎、巖本善治同著 公娼可滅	一冊	同四	錢
農學士寺尾熊三君著 林學生星野愼之介君著 植物學	一冊	同十二	錢
昆虫 植物 金石 採集法	一冊	同十	錢
明治女學校教師八木兼辰君著 和書手本	四冊	同一	圓
女學雜誌社編輯 演説著作材料	八冊	同四十	錢
巖本善治君著 鐙子小傳	一冊	同八	錢
訓蒙繪双紙 猫と鼠	一冊	同五	錢

下六番町六番地

女學雜誌社

東京廢娼運動出費録

拾五圓六十四錢五厘 東京廢娼運動費募集金殘

二圓 外に無名氏寄附

計十七圓六十四錢五厘 右女學雜誌第二百四十八號掲載以后貯置きし分

廿四年十一十二兩月廢娼同盟會大會の爲め給用する處ろ左の如し、

五錢	（十月三十日）	臨時報告端書五枚
三錢	（十月三十一日）	仝三枚
八錢	（十一月一日）	加藤勝弼氏迄往復
十二錢	（十一月一日）	仝車代
六十一錢	（十一月二日）	府下各新聞社回訪車代
一圓七十五錢	（讀賣新聞）	廣告料
一圓	（國會新聞）	廣告料
壹圓	（毎日、國民新聞）	廣告料
七錢	（十一月三日）	金蘭社へ往復車代
十三錢	（十一月四日）	辨士へ演題催促ハガキ代
二錢	（十一月五日）	平野氏に湯淺氏の端書屆け
二錢	（十一月五日）	國民新聞及島田三郎氏へハガキ
十五錢	（十一月[illegible]）	本郷警察署へ往復
十八錢	（十一月六日）	新橋より築地平野氏へ所々回訪車代
七錢	（十一月六日）	辨士七氏へはがき代
三錢	（十一月六日）	同發后はがき三枚
一錢	（十一月七日）	石島良三郎氏へはがき
六錢	（同）	築地平野氏へ使
九錢五厘	（同）	卷紙一本
四錢	（同）	四辨士へはかき
一錢五厘	（同）	半紙代
六錢	（同）	墨汁二「カン」
一圓	（同）	會場掛手當料
二錢	（同）	ヒン三十本代
十圓	（同）	中央會堂へ拂渡し
十四錢	（十一月九日）	七辨士へ謝狀出す
四錢五厘	（同）	狀袋代
一圓	（同）	謝禮さして會場取締へ
六錢	（同）	永田町へ使
二十錢	（十一月十三日）	十新聞社へ郵税
六錢	（十一月十九日）	中倉、布施、原三氏へ郵税
九錢五厘	（十一月二十日）	卷紙一本代
二錢	（十一月廿四日）	吉植庄一郎氏へ郵税
七十二錢四厘	（十一月廿三日）	同盟會用菓子挿花代
三十五錢	（十二月十四日）	府會議員訪問の件に付奔走費
四錢	（同）	郵税

合計十九圓三十四錢四厘

差引壹圓六十九錢九厘不足也

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

著者	書名	冊數	價
鈴木弘恭大人述	つれ〲草講義	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	一冊	同十六錢
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	一冊(改正)	上三十五錢 並二十八錢
船越鼎太郎君著	産婦小兒攝生法	一冊	金十六錢
關輪正路君案	ひめ鑑	一冊	同四十五錢
中島俊子君著	善惡之岐	一冊	同卅五錢
横山雅男君著	婚姻論	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	一冊	同五錢
巖本善治君述	妓樓全廢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治同著	公娼可滅	一冊	同四錢
農學士寺尾熊三君著	植物學	一冊	同十二錢
林學生星野愼之介君著	昆虫植物金石採集法	一冊	同十錢
明治女學校教師八木兼辰君著	和書手本	四冊	同一圓
女學雜誌社編輯	演說著作材料	八冊	同四十錢
巖本善治君著	鐙子小傳	一冊	同八錢
訓蒙綸双紙	猫と鼠	一冊	同五錢

下六番町六番地
女學雜誌社

東京廢娼運動費錄

金額		
拾五圓六十四錢五厘	東京廢娼運動費募集金殘	
二圓	右女學雜誌第二百四十八號掲載以后貯置きし分 外に無名氏寄附	

計十七圓六十四錢五厘

廿四年十一十二兩月廢娼同盟會大會の爲め給用する處ろ左の如し、

金額	日付	摘要
五錢	(十月三十日)	臨時報告端書五枚
三錢	(十月三十一日)	仝三枚
八錢	(十一月一日)	加藤勝彌氏迄往復
十二錢	(十一月一日)	仝車代
六十一錢	(十一月二日)	府下各新聞社回訪車代
一圓七十五錢	(讀賣新聞)	廣告料
一圓	(國會新聞)	廣告料
壹圓	(每日、國民新聞)	廣告料
七錢	(十一月三日)	金蘭社へ往復車代
十三錢	(十一月四日)	辨士へ演題催促ハガキ代
二錢	(十一月五日)	平野氏に湯淺氏の端書屆け
二錢	(十一月五日)	國民新聞及島田三郎氏へハガキ
十五錢	(十一月六日)	本郷警察署へ往復
十八錢	(十一月六日)	新橋より築地平野氏へ所々回訪車代
七錢	(十一月六日)	辨士七氏へはがき代
三錢	(十一月六日)	同發后はがき三枚
一錢	(十一月七日)	石島良三郎氏へはがき
六錢	(同)	築地平野氏へ使
九錢五厘	(同)	卷紙一本
四錢	(同)	四辨士へはかき
一錢五厘	(同)	半紙代
六錢	(同)	墨汁二「カン」
一圓	(同)	會場掛手當料
二錢	(同)	ヒン三十本代
十圓	(同)	中央會堂へ拂渡し
十四錢	(十一月九日)	七辨士へ謝狀出す
四錢五厘	(同)	狀袋代
一圓	(同)	謝禮さして會場取締へ
六錢	(同)	永田町へ使
二十錢	(十一月十三日)	十新聞社へ郵税
六錢	(十一月十九日)	中倉、布施、原三氏へ郵税
九錢五厘	(十一月二十日)	卷紙一本代
二錢	(十一月廿四日)	吉植庄一郎氏へ郵税
七十二錢四厘	(十一月廿三日)	同盟會用菓子挿花代
三十五錢	(十二月十四日)	府會議員訪問の件に付奔走費
四錢	(同)	郵税

合計十九圓三十四錢四厘
差引壹圓六十九錢九厘不足也